



第19回「野生生物と交通」研究発表会のご案内

「野生生物」と「交通」に関わる問題は、異分野間にまたがる学際的な研究テーマであるため、その情報交換の機会が極めて少ないのが現状です。「野生生物」と「交通」に関する知識の情報交換の場として、この機会にぜひご活用下さい。多くの方のご参加をお待ちしております。現在、論文発表、パネル展示、聴講、懇親会等のお申込みを受け付けております。詳しくはホームページ

<http://www.wildlife-traffic.jp/>をご覧ください。



「野生生物と交通」ウェブサイト

- ◆開催日：令和2年2月17日(月)
- ◆会場：札幌コンベンションセンター 107・108会議室(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)
- ◆論文発表：無料[令和元年12月24日(火)]
- ◆パネル展示：無料[令和2年1月10日(金)]
- ◆聴講：無料[令和2年2月10日(月)締切]
- ◆講演論文集：2,500円(開催当日発売)[予約：令和2年2月10日(月)締切]
- ◆懇親会：レストランSORA 4,000円[予約：令和2年2月10日(月)締切]
- ◆主催：(一社)北海道開発技術センター
- ◆共催：(一社)エゾシカ協会
(公財)北海道環境財団
(一社)シーニックバイウェイ支援センター
(一社)アニマルパスウェイと野生生物の会、
アニマルパスウェイ研究会
- ◆協力：エコ・ネットワーク

※講演論文集は、研究発表会後もエコ・ネットワークにて購入できます。(送料無料)
※講演論文集の購入に関するお問合せは、エコ・ネットワークまでご連絡ください。(TEL 011-737-7841)

お申込み・お問合せ：

(一社)北海道開発技術センター「野生生物と交通」研究発表会係(担当：向井・野呂)
TEL: 011-738-3363 FAX: 011-738-1890
E-mail: wildlife@decnet.or.jp ウェブサイト: <http://www.wildlife-traffic.jp/>

編集後記

最近は寒かったり、暖かったり、気温の差が激しくて体調管理が難しいですね。この時期とっても嫌なのはインフルエンザ。近所の小学校では学年閉鎖になるかというほどの猛威を振り、漏れなく家族もすでに発症者が1名。忙しい時期に差し掛かるうこの時期、次は自分なのではないかという恐怖に日々襲われています。みなさんもくれぐれもお気を付けください!!(R.W)



dec monthly

2019.11.1 vol.410 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンズリートピック)
日本風景街道大学ニセコ羊蹄キャンパス
シーニックバイウェイ北海道推進協議会

dec Interview >>> 大地みらい信用金庫 理事長、「知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウェイ」代表 遠藤 修一 氏

活力ある地域づくりや魅力的な観光空間の形成を目指す「シーニックバイウェイ北海道」に、今年9月、新たな候補ルートとして登録されたのが「知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウェイ」です。代表者で、大地みらい信用金庫理事長として根室・釧路地域の振興に情熱を傾けておられる遠藤修一さんを根室市の本店にお訪ねしました。

「知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウェイ」は、日本最東端の1市7町(根室市、羅臼町、標津町、中標津町、別海町、浜中町、厚岸町、釧路町)にわたるルート。日本離れた景観など独自性の高い地域資源が自慢ですね。

世界自然遺産・知床と5つのラムサール条約登録湿地、田畑で区切られることのない広大な酪農地帯、起伏のある海岸線や国内有数の水揚げを誇る水産業など魅力は豊富にあります。それらを「つないでいこう」というところからシーニックバイウェイの取り組みは始まりました。副代表はフットパスの振興に取り組んできた酪農家集団AB-MOBITの馬場晶一さん、事務局はその一員の伊藤泰通さんで、2015年にフットパスをどんどんつなげて整備しようと「フットパス・ロングトレイル広域化検討会」が始まったことがシーニックバイウェイ検討の端緒になったのです。当金庫は、それに先んじてAB-MOBITの協力により「大地みらいフットパス・ウォーク」という地域貢献活動を2014年まで10

年間開催していました。年1回、自然や歴史などテーマを変えて専門家のガイドで地域の魅力を味わう企画で、大変好評でした。

私にとっての「知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウェイ」の魅力は第一に「体験」、第二に「自然」、第三に「歴史」です。これらは磨けば磨くほど面白くなっていくでしょう。

「体験」は、例えば羅臼のウニの殻割り体験や標津の沖締めサケをさばいてイクラをつくる体験など。「体験=文化」だと思いますが、生産現場をビビッドに発信したいですね。「自然」は、例えば冷涼な気候独特の珍しい植物に着目していただきたい。ネムロコウホネ、シコタンタンポポ、チシマフウロなど、ここでしか見られない貴重な植物がたくさんあります。野鳥、ヒグマ、シャチなど動物に関してもその独自性は言うまでもありませんが、さらなる強みは、正確で心に届く解説のできる優れたガイドが地元にいること。私は地域の魅力発信に、こうした「人」へのフォーカスが欠かせないと思っています。

「歴史」に関しては、「ふるさとポケットガイドブック」シリーズ刊行など貴金庫の地域貢献活動でも発信に注力されています。この地域ならではの歴史の醍醐味とはどのようなことでしょうか。

「歴史」は個人的にも大いにこだわりを持っている部分です。特に5世紀から11世

根釧の自然、産業、歴史に潜在する観光資源は実に豊かです。伝え切れていない魅力を発信することが私たちのミッション。日本離れたルートに磨いていきます。

dec Interview

えんどう しゅういち

1956年標津郡中標津町生まれ。78年小樽商科大学卒業後、根室信用金庫入庫。2001年大地みらい信用金庫に改称後、経営企画部長、専務理事を経て2010年から現職。同金庫が12年に設立した「KON-SEN(根釧)魅力創造ネットワーク」の代表を務める。18年から北海道信用金庫協会副会長。ウイスキー愛好家で歴史研究も楽しむ。



紀に大陸からオホーツク海を渡り、この地域に住みついた北方系民族のオホーツク文化については、これまで十分に発信されてこなかっただけに、多くの人に注目いただきたい。今年、文化遺産の継承者を顕彰する「読売あをによし賞」(読売新聞社主催)で、オホーツク文化の研究に長年携わった根室市の北構保男さんが本賞を受賞されたのは嬉しいことでした。

近世の根釧地域にも独特の国際関係史があります。北海道で歴史が古いのは函館だとよく言われるのですが、根釧地域では17世紀から諸外国とのつながりが始まっている。1643年にオランダの探検家フリースが日本北方の航海で厚岸などを訪れたのを最初に、銀の探索などを目的に当時の覇権国であるオランダやスペインの船が来ています。18世紀以降は、高田屋嘉兵衛や大黒屋光太夫の活躍などロシアとの交流に尽くした人々の豊かなストーリーがあります。

明治期には短い期間ですが、函館、札幌、根室の三県時代(1882~1886年)がありました。これはロシアとの樺太・千島交換条約で千島列島が日本領になったのに対応して北方の統治を整えようという国の意図があったからでしょう。このように、根釧地域は良くも悪くも「際(きわ)にある」ことによる独特の歴史を歩んできたのです。その「際」の個性とも言うべきものを大事にしたいですね。

シーニックバイウェイ北海道は昨年、(一社)北海道信用金庫協会さんと包括連携協定を締結し、地域レベルでも信用金庫さんとの連携は深まりつつあります。貴金庫は理事長自らがルート代表に。その背景には何があるのでしょうか。

私は、2010年の理事長就任以来、経営のテーマとして「価値創造型金融」を標榜してきました。根室・釧路地域は酪農や漁業の一大生産地ですが、道内域際収支はマイナス約1千億円あり、経済としては自立していない。これは全国における北海道の域際収支についても言えることですが、域際収支をプラスにできるように地域の力をつけていく

ことが価値創造型金融のコンセプトです。そのためには「獲り上手、生産上手」にとどまらず「売り上手、発信上手、提案上手」になって生産物の付加価値を上げることが必要。その面でのレベル向上を図りたいのです。

長年、全国を圧倒してきたサケ、マス、サンマなどの漁獲量も200カイリ問題やロシアとの漁業問題などで近年は減船が続き、逆風のさなかにあります。しかし、4つの漁協があり、確固とした生産基盤はある。つまり、酪農も含めれば、乳製品、水産品の原材料という資源と生産基盤、そして歴史はあるのです。問題は、そこに潜在する多様な魅力がきちんと発信されてこなかったことであり、その発信、顕在化を手伝うのが私たちのミッション。シーニックバイウェイに名乗りを上げた背景にもそうした思いがあります。



ルート運営代表者会議の様子

まさに根釧の魅力が多様なかたちで精力的に発信されています。「KONSEN(根釧)魅力創造ネットワーク」は、その最前線の取り組みですね。

根室、釧路の優れた食の資源を全国、海外に発信することを目的に「産・学・官・金(融)」が連携して取り組む組織として2012年に設立しました。現在、54の事業者と17の支援機関が参画し、私どもの地域みらい創造センターが事務局を務めています。

目下の柱は食の発信とアドベンチャーツーリズム。事業者が主人公で、そのサポート部隊として道経済産業局、道振興局、市町、釧路公立大学、民間では全日空さんや私ども金融機関などが支援しています。食の発信では、国内最大級の食の見本市「フーデックス・ジャパン」出展をはじめ、香港、シンガポールの展示会やドバイの「ガルフード」、ボストンの「シーフードショー」など世界的な食品見本市に参加し、根釧の

食の魅力を伝えてきました。アドベンチャーツーリズムは、3年ほど前からプロのガイドの方々と連携し、旅行事業者やメディアを視察に招くファム・トリップを開催したり、ガイドの人的ネットワークを構築するという取り組みを進めています。

「KONSEN(根釧)魅力創造ネットワーク」とは別に、今年初めて挑戦したのは「NoMaps釧路・根室」です。「NoMaps」は、札幌では今年4回目が開催されましたが、根釧での第1回を私が実行委員長を務めて今年9月に開催しました。内容は地元産業と最先端の工学・情報技術をつなぐビジネス・カンファレンスと地元高校生に地域資源を活用したビジネスプランを考えてもらう「高校生ビジネスコンペティション」。根釧地域の高校7校12チームの生徒が参加し、懸命に発表する姿には地域愛が感じられて、とても良かったです。

最後に、根釧の観光振興に関する今後の課題をお聞かせください。

道東自動車道は、現在、厚岸付近まで着工になっていますが、一日も早く整備、延伸されることを願っています。JRの現況を考えると道東では道路が命綱です。水産物など鮮度重視の物品の輸送ルートとして安定的で利用度が高いのは道路であり、観光でも、近年はインバウンドを含め、レンタカーが主力になっています。ナビゲーションなど安全面に十分配慮された車で、安心して楽しんでもらう道路環境は大変重要です。ファム・トリップでも指摘される課題は二次交通としての道路と宿です。宿は手軽なものから高級なものまで多様化が必要でしょう。ヨーロッパのB&Bやオーベルシュ、また、素泊まりのゲストハウスなど、リーズナブルな価格で大草原と海の見える絶好のロケーションにふさわしいおしゃれな宿が増えてほしいですね。

私は少しゴルフをするのですが、根室のゴルフ場も景観に恵まれて、本当にスコットランドのようです。私どもも応援してきた厚岸蒸溜所のウイスキーもおいしいと評判を得ていますし、ウイスキーを味わいながらゴルフを楽しむなんて最高ですね。

日本風景街道大学 × シーニックバイウェイ ニセコ羊蹄キャンパス 北海道推進協議会



「日本風景街道大学」は景観や自然など地域資源を生かした地域づくり、人づくりの支援・推進を目的にNPO法人日本風景街道コミュニティが全国各地で開催する取り組み。今回は「シーニックバイウェイと観光地域づくり」をテーマに、シーニックバイウェイ北海道推進協議会と同時開催され、羊蹄の麓で道内外の関係者が盛大に交流しました。[2019年9月20~21日・ニセコ町民センターほか/主催:日本風景街道大学ニセコ羊蹄キャンパス実行委員会]

シーニックバイウェイ北海道推進協議会

岩田会長の挨拶で開会后、構成機関の代表などが4つの議題を審議。提案中の候補ルート「知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウェイ」については、ルート審査委員会の石田委員より審査結果について説明され、正式に候補ルートに。ルート代表の遠藤修一氏がルート紹介を兼ねた謝辞を述べました。続いて、模範となる優れたルート活動を表彰する「ベスト・シーニックバイウェイ・プロジェクト2018」の審査結果が説明され、下記の受賞が承認されました。この他、ルート審査委員会の現地視察(十勝方面)、「秀逸な道」の進捗など今年度の取り組み状況が報告されました。

開会あいさつ

シーニックバイウェイ北海道
推進協議会
岩田 圭剛 会長
(北海道商工会議所連合会 会頭)



シーニックバイウェイ北海道
ルート審査委員
石田 東生 氏



シーニックバイウェイ北海道
ルート審査委員
白井 純子 氏



シーニックバイウェイ北海道
ルート審査委員
高野 伸栄 氏



知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウェイ事務局の伊藤泰通氏より提案内容の発表



岩田圭剛会長と知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウェイのメンバー



会議の様子



ベスト・シーニックバイウェイ・プロジェクト2018

各ルートの投票で選出される活動団体賞と、ルート審査委員会による審査を経て選出された3部門賞と最優秀賞が推進協議会で承認され、受賞が決定しました。

<p>最優秀賞 活力ある地域づくり部門賞</p> <p>どうなん道の駅 連携事業 どうなん・道分シーニックバイウェイ</p> <p>道の駅同士の連携のストーリーをシーニックが提供し、道の駅と連携することで地域周遊促進の効果が図られ、地域の活性化につながる取り組み。その先進性と他地域での展開可能性、普遍性が評価されました。</p>	<p>活動団体賞 魅力ある観光空間づくり部門賞</p> <p>「きた北海道エコ・モビリティ」の推進R3モニターツアーの実施 天塩川シーニックバイウェイ 宗谷シーニックバイウェイ</p> <p>体験型観光を通じて地域課題解決を図る取り組みで、2ルートの広域連携の面でも評価を得て活動団体賞に。「道・川・鉄道」連携の地域価値創出のダイナミックさとツアー造成などの実践力で同部門賞に輝きました。</p>	<p>美しい景観づくり部門賞</p> <p>道路景観の改善に向けた道路附属物の影響評価と改善 釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ</p> <p>「景観の持続的な改善」を目標にマスタープランを策定。現地視察による優先度評価を実施して中期的な時限計画とフォローアップ体制を再構築するなど、PDCAサイクルを継続的に回して成果を上げている点が評価されました。</p>
---	--	---

日本風景街道大学ニセコ羊蹄キャンパス



来賓あいさつ
群馬県嬭恋村 熊川 栄 村長

2012年に「日本風景街道」の初の全国サミットをわが村で開催し、自治体連絡会としてもお手伝いしてきました。北海道の観光ルートは素晴らしい。私たちの「浅間・白根・志賀さわやか街道」を含め、力を合わせて快適な道をつくっていききたいものです。

講演

シーニックバイウェイ北海道のあゆみ

前 国土交通省 北海道局長 和泉 晶裕 氏



20年前、私は小樽開発建設部の道路課長で、ニセコ町には道の駅計画の関連などでさまざまなご縁がありました。思えばニセコは私にとってシーニックバイウェイ(以下、シーニック)を考える上での起源とも言うべき場所です。シーニック取り組みの最初のきっかけは、1996年策定の北海道総合開発計画の検討中に石田東生先生から「北海道は景観と観光だ」とお話しいただいたことで、道の駅制度が始まり、道内の一般国道網が整備されるなどドライブ観光需要が高まりつつある時期でした。それで2001年の省庁再編で誕生したばかりの国土交通省北海道局に最初の重点施策として出したのが「シーニックバイウェイ北海道」です。

キングの設置を始めました。各地で増えています、地域でのワークショップで設置場所などが検討されているのだらうと思います。ルート指定は、候補ルートを経て、モデル的な事業がきちんと運営されることが認められて指定ルートへの申請に進みます。この候補ルートの期間がいわば熟成期間として非常に重要であり、指定後の継続性について担保できるような環境で指定するという制度にしています。05年にはシーニックバイウェイ支援センターも設置し、冊子の発行など認知度アップの努力がなされていますが、いまだ十分な認知度を得ていないという苦勞があります。また、活動団体の方々のモチベーション維持のために優れた取り組みの表彰やルート代表者会議を行い、活発な議論ができるようにしてきました。このほか活動資金を補い、知名度アップを図るために民間企業との連携協定制度をつくっています。私たち開発局の担当者も人事異動で2年ごとに交代となりますが、熱心さ故に担当者それぞれの個性が、ある程度、シーニックの特色に反映されるのもいいことではと感じています。そして、制度が長く続くことで、より多くの職員がシーニック・マインドを共有し、景観への意識を浸透させていくことになるのは行政として大きな意味があると思います。

02年に本場米国のシーニックバイウェイの視察に出かけ、03年に石田先生に委員長をお願いして検討委員会を立ち上げました。間もなく2つのモデルルート(旭川-占冠R、千歳-ニセコR)を指定し、32の活動団体を認定して実践的な活動がスタートしました。ルートごとにワークショップを行い、飲み会でも交流を深めました。04年からは集中活動月間を設けて情報発信などを強化。行政と住民を橋渡しするルートコーディネーターを設置したり、地域の議論に必ず道路行政関係者が参加する行政参加型の取り組みなど工夫を重ねていきました。米国の手法に習って設けたのが「シーニックバイウェイ北海道取り組みの心得十カ条」。「楽しくなければ継続できない」の第一条は最重要だと思っています。こうしたモデルルート時代の効果の一つは道路行政と地域住民との距離感が縮まったこと。道路行政は従来、住民から除雪や除草、用地交渉などのかかわりでマイナスイメージに捉えられがちでしたが、地域を良くするために職員が積極的に動き、地域の印象が変わってきたのです。

最後に、シーニックの成果を挙げるならば、行政と住民の間の距離感の縮まりの他に道路景観に対するさまざまな人の意識が変わってきたこと。道路行政的には協働型インフラマネジメントのような仕組みづくりに変化してきています。今後の展開方向については、人口減少、高齢化を背景に活動の担い手が不足するなかで、活動の総合性、連携性が重要になるでしょう。また、シーニックのおもてなしとは、自分の家にお客さんを招くのと同様の感覚が必要だと思いますが、そのおもてなし費用をどう捻出するかは依然、課題です。さらにシーニックの仕組みを次の世代にどうバトンタッチし、世代に合わせてどう変えていく必要があるのかも考えていかなければならないと思います。

05年には推進協議会が設立され、指定ルートは増えていきます。地域の方々が頑張ってもシーニックとしての全体の統一感はないかなかなか得られないということで、道路行政側ではビューポイントパー

パネル展示

シーニックバイウェイ北海道の取り組みの一環として道路景観の重点的保全が行われる「秀逸な道」。地域ご自慢の国道15区間のえり抜き景観が動画を合せて紹介されました。

シーニックマルシェ

ニセコの地場産品をはじめ、支笏湖洞ニセコルートと釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイからはスイーツなど人気商品が並び、休憩時間を楽しむ参加者でにぎわいました。

話題提供

日本風景街道における今後の展開及び道路協力団体制度の活用

国土交通省 道路局 環境安産・防災課長 渡辺 学 氏



「日本風景街道」は、2007年に日本風景街道戦略会議の提言を受けて登録を開始し、現在、全国の登録数は142ルートです。取り組みの背景には当時の観光の斜陽化、若者の車離れなどがありました。北海道では全国に先んじて米国に先進事例の視察が行われ、2005年に協議会が設立されています。国土交通省道路局では、それを追うように取り組みを進めてきました。

の連携促進、④表彰制度の導入、⑤道路協力団体制度の運用弾力化です。

登録開始から10年を経て、活動に停滞感のあるルートも見られたため、2018年には活動状況の検証と今後の展開に向けた有識者懇談会(石田東生委員長)を設けました。課題の指摘や対策についての提言がまとめられ、現在、それを踏まえた取り組みを進めています。具体的には、情報発信・共有として①ポータルサイトのリニューアル、②案内看板などの検討、活動環境の整備として①登録内容の再確認、②関係者間の交流促進、③関連施策と

道路協力団体制度は、道路管理者と連携して清掃活動や花植え、オープンカフェなどの活動を行う地域の活動団体を指定し、地区の課題解消や賑わい創出などの取り組みを推進する制度で、現在、全国で31団体が指定されています。業務は第1〜6号の種類があり、業務内容の充実や収益使途の拡大など、より活動がしやすいよう見直しを行っています。

今後の展開に向けては、登録内容の再確認を踏まえて個別ルートの課題を洗い出し、対応策を検討。専門家による助言やタイアップ事業などの効果的なプロモーションを図るなど、個々のルートを磨いていくとともに、風景街道の知名度向上とブランド化を進めたいと考えています。

開催地報告

ニセコ町における観光地域づくりの取り組み

ニセコ町長 片山 健也 氏



作家・有島武郎は1922年、有島農場を無償解放し、「相互扶助」という遺訓をニセコの地に遺しました。それは現在のSDGsに通じる精神で、町は今、SDGsに取り組んでいます。また、先代の町長による住民自治、財政民主主義に基づいた自治体改革を受け継ぎ、日本初の自治基本条例に則った「公益・公開・公正」のまちづくりを進めています。そうした取り組み例が「道の駅ニセコビュープラザ」(1997年開設)で、白紙段階から「住民検討会議」で議論を重ねて建設。当初、施設内で地元農家の直売を始めた際には農協の強い反対がありましたが、農家の奥さんや高齢者たちの活躍もあり、現在は施設全体で年間4億以上の売上げがあり、農業、観光の両面で成果を上げています。

水源保護条例、景観条例などを整備。現在、「環境モデル都市」の取り組みを進めています。観光振興については町民の先覚的な動きによる日本初の観光協会の株式会社化や台湾へのセールスを重点にした「東アジア誘致協議会」設立があります。そして、世界に「ニセコ」を広く知らしめたのは、雪崩からスキーヤーを守る「ニセコルール」です。これはニセコ雪崩調査所長の新谷暁生氏の創設したルールで、氏は世界的な賞を受賞するなど国内外の高い評価を受けています。

パブル崩壊後に観光が低迷した時期には住民と徹底した議論を行い、「環境、景観こそニセコの価値」と、地下水保全条例、水道

現在、役場では外国人職員を増やすなどインバウンド対応に注力していますが、ニセコ町への外国人観光客入込数は14年前の15.8倍に急増しています。今後も、将来を見据え、「厳しい景観・環境規制が共感に基づく良好な投資を生む」という方針で観光地域づくりに取り組んでいきたいと思っています。

分科会

分科会は3つのテーマで開催され、座長、副座長の進行・サポートにより全国各地また海外の先行事例を学び合い、今後の取り組み方について掘り下げた意見交換が行われました。

テーマ1 シーニックバイウェイとインバウンド（観光地域づくり）



- 【登壇者】
- ・大久保 実氏
ジャパンプレミアムインターナショナル 代表取締役
 - ・小口 良平氏
諏訪湖八ヶ岳長自転車活用推進協議会 代表
 - ・西村 理佐氏
プライムトラベル 代表取締役社長

シーニックバイウェイ支援センター代表理事の原文宏座長のもと、まず、ニセコ町で不動産開発に携わる大久保氏がニセコエリアの観光面の推移と国際的な投資が集中する背景を説明。VFR(Visit Friends and Relatives:知人・親族を訪ねる旅行)が新たな観光産業を切り開く上でもキーワードになると提起。諏訪湖八ヶ岳周辺でサイクリング推進に取り組む小口氏は、ガイドは地域をつなぐコンシェルジュであり、オーバーツーリズム防止のガーディアンと語り、インバウンド・サイクリングの可能性を説明しました。副座長の佐藤雄一氏は、ロコ(地域)サイクリストの顕在化を重点にした静岡県サイクルツーリズム協議会の活動を紹介します。小規模ガイドツアーや遠隔地のサイクリスト交流の意義を指摘。西村氏はシンガポールを主とする訪日旅行専門会社の立場から、地域の家庭料理の会や鳥取県の小学校との交流など訪日者が地域の人とつながる素晴らしさを紹介しました。フロアからの「持続可能な観光のために必要なことは」の質問に対しては「地域のポリシーやルール」、「地域づくりと観光の融合」、「交流重視」などが挙がり、従来の観光産業の価値転換の必要性が浮かび上がりました。

テーマ2 シーニックバイウェイとビジネス（活動の継承）



- 【登壇者】
- ・水野 宏治氏
国土交通省 道路局 企画課 評価室長
 - ・塚越 秋三氏
NPO法人徳合ふるさと会 代表
 - ・野村 文吾氏
十勝シーニックバイウェイ トカプチ雄大空間 代表

白井純子氏(日本風景街道コミュニティ理事)を座長に、活動の継承を支えるビジネス面の取り組みについて話題提供と議論がなされました。野村氏は「トカプチ雄大空間」を中心に十勝シーニックバイウェイの活動を紹介したのち、ルート指定時から取り組んできたチケット販売(トカプチめぐり券→ガーデン・グルメ・温泉チケット→会員制とかちファンクラブ)の成果や課題を説明。塚越氏は新潟県の「NPO法人徳合ふるさと会」の活動について、草刈りやアルミ缶・鉄くず回収、道の駅での生鮮品販売などで得た収益をさらなる地域の魅力づくりの資金に充て、来訪者を増やしている様子を伝えました。水野氏は、全国に1160駅に達した道の駅のビジネス展開について解説。今年度から民間ノウハウ活用を進め、公益機能、経営機能、収益機能の強化に取り組む方向性が示されました。十勝シーニックバイウェイのルートコーディネーターでもある紺野裕乃副座長からは、これまでのシーニックバイウェイのビジネス面の取り組み事例(チケット事業、モニターツアーなど)が紹介され、これらを踏まえディスカッションでは、交流や連携、人材育成の大切さなどビジネス展開に向けたヒントが話し合われました。

テーマ3 シーニックバイウェイと景観づくり（景観の保全と活用）



- 【登壇者】
- ・古谷 和之氏
支笏洞爺ニセコルート NPO法人 WAOニセコ羊蹄再発見の会 理事長
 - ・ハイディ・パンコウ氏
コロラドシーニックバイウェイ ユーレイ市観光局 担当責任者
 - ・加藤 千明氏
日本風景街道 別府湾岸・国東半島海への道推進協議会 事務局長

山内秀彦氏(日本風景街道コミュニティ理事)が座長を務め、「地域の景観をどのように守り、活用するのか」をテーマに3人が話題提供をしました。古谷氏はニセコ羊蹄エリアにおける「電線・電柱のみえない化」の取り組みを中心に発表。羊蹄山の眺望を妨げていた電線の移設を粘り強く働きかけて実現した経緯をはじめ、景観診断を行って道路附属施設の改善やビューポイントパークの整備を進めるなどの活動を紹介しました。米国のシーニックバイウェイ発祥地コロラドで活動に取り組むハイディ・パンコウ氏はサンファン・スカイウェイとアルパイン・ループを中心に道の特色や活動を紹介。温泉と歴史的施設が重要な観光資源になっていることを紹介しました。別府で地域づくりに取り組む加藤氏は、かけかえない日々の暮らしの集積が風景であり、そこに表れる地域の人の善意の堆積が「世間遺産」とし、それを地域の人々が再認識して自信を持つことが観光につながると活動を報告。副座長の長内正宏氏(北海道開発局道路計画課)からは「秀逸な道」の取り組みが紹介され、さまざまな角度から地域が持続的に景観を守るためのポイントについて話し合われました。

総括

3分科会終了後、各座長から議論の全体共有のために振り返りの報告が行われ、その後、田中孝治氏(日本風景街道コミュニティ理事)から「高規格道路から農道まで厚みをもった道のストックをどう生かすのか、地域の力が試される時代」など今後に向けた激励のメッセージが。最後は「地域に住んでいる我々が下からよいしょと持ち上げない限り、地域はよくなる」という氏の呼びかけにより全員「ヨイショ」の掛け声で総括を終えました。

自転車 エクスカーションでニセコ羊蹄の景色を大満喫!

自転車エクスカーションは、地元のニセコ羊蹄自転車走行協議会(YNCA)主催の1 dayサイクリングイベント『ワンダーサイクリング』と合同で開催しようということで、事前にYNCAと何度も打ち合わせを重ね、当日を迎えました。本番当日は雲ひとつない快晴に恵まれ、日本風景街道大学から25名、ワンダーサイクリング参加者と合わせると総勢約50名の参加者が、美しい大地と雄大な羊蹄山を望みながら走るという最高の自転車エクスカーションとなりました。

参加者は、早朝の澄んだ空気の中、ホテルを出発し、ニセコ除雪ステーションにオープンしたばかりのサイクル拠点『サイクルオアシス』でYNCAのオープニングイベントに合流。9時に道の駅ニセコビュープラザから総勢50名が一斉にスタートしました。

一行は、澄み切った青空と爽やかな秋風の中でサイクリングを楽しみながら、途中、ニセコ町にあるダチョウ牧場でダチョウと触れ合ったり、真狩と京極それぞれの道の駅でご当地スイーツであるゆり根最中や名水珈琲ゼリーなどを味わいました。参加者のアンケートには「羊蹄山を色々な角度から農地と共に見える風景が最高でした」「道が広くて走りやすかった」という声とともに「ガイドの皆さまの取り計らいと気づかいに感謝」との声も。走行環境の良さと同時に、ライドをサポートしたガイドを評価する声もあがり、ニセコ羊蹄エリアのサイクル・ツーリズムが今後さらに発展していくことを予感させる実りあるエクスカーションとなりました。



ニセコ町にある「ダチョウ牧場」で、ダチョウと羊蹄山と一緒にハイチーズ!

羊蹄山をバックに気持ちよくライド!

約40kmのコースを全員で無事完走! ゴールとなった京極の道の駅での全員集合写真

バスで行くエクスカーション

40名が参加したバスエクスカーションは、羊蹄山を一周し、ニセコ羊蹄エリアのシーニック活動や美しい風景などを巡るコースとしました。各視察先では、ニセコ町の片山健也町長や地域活動団体メンバーが現地ガイドを行い、双方向の交流促進が積極的に図られるよう工夫しました。

最初の立ち寄り箇所は、ニセコ駅付近で旧でんぷん工場等の建造物を保全し、地域活性化の拠点となっている「ニセコ中央倉庫群」。そして、前日の開催地報告で農家さんが主体的に参画している直売所等の先進事例報告がなされた「道の駅ニセコビュープラザ」へ。いずれも片山町長による丁寧な説明により、ニセコ町での地域づくりについて、現場で活発な質疑応答がなされました。

続いて、「秀逸な道」区間を走行しながら、羊蹄山を一望できるビューポイントパーク2箇所(①倶知安町八幡地区/②喜茂別町相川地区)を視察。「八幡パーク」では、NPO法人WAOニセコ羊蹄再発見の会 小野幸子氏より電線類の見えない化による景観づくりの取組みが紹介され、「相川パーク」では、NPO法人きもべつWAO 山本浩一氏から植樹樹を活用したシーニック菜園や道路協力団体の取組み等について説明いただきました。

参加者アンケート結果を見ても、現地ガイドを筆頭に総じて満足度が高く、有意義なエクスカーションとなりました。



道の駅ニセコビュープラザでガイドをするニセコ町長 片山 健也 氏

電線類の見えない化の取組みが行われた「八幡ビューポイントパーク(倶知安町)」での記念写真

シーニック菜園で採れた枝豆が振る舞われた「相川ビューポイントパーク(喜茂別町)」